待機時間　月夜

レモナー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
待機時間　月夜

【Ｎコード】
Ｎ５１７１Ｐ

【作者名】
レモナー

【あらすじ】
前回の「待機時間」が、密かにロングブームでアクセスを伸ばし続けているので、調子に乗ってパート２です。
今回は逆で男二人のトークがメイン。舞台は訓練場。シリアスのはずの空気の中、どんな会話が繰り広げられていくのか。

ジャングルの中で（前書き）

誤った知識が入り混じり、こんなものは軍隊でないと思う方、おひき返しください。ここはただの談話室です。

ジャングルの中で

「口の中渇きません？」

初めての戦闘訓練の前、そいつが言ったのはこうだった。
「お前、名前は？」
「それより口の中渇きません？」
何だこいつは
「別に」
「俺は須賀です」
口の渇きの話はどこ行った
「こういう場ってなんか手持無沙汰で、口渇くんすよ」
手持無沙汰の使い方がおかしい
「そおだっ、梅干しっすよ」
放っておこう
「梅干しを考えたら、唾液腺が緩むんじゃないですか。オレ梅系の菓子が大好きでして」
知るか
「あの、めちゃくちゃ甘酸っぱいのあるじゃないすか。あれを、あれを一度でいいから二つぶいっぺんとか…くぅう、考えただけで美味いっすよね！！」
勝手にほざいてろ

「さてさて、先輩」
「俺は先輩じゃない」
「何でもいいじゃないですか。さて先輩」
はやく言えよ
「名前はなんすか？」

ものすごく無視したい衝動に駆られた。
「…瀬戸」
「瀬戸？　瀬戸ー瀬戸ー瀬戸先輩っすね」
何気に三回呼び捨てしたな
「また重苦しい装備ですよね」
今回は野外活動の訓練だ。
実践に備えて、防弾防暖防談…ばっちりだ
「部隊のみんないないですねえ」
「隠れるのが普通だからな」
勿論俺も隠れている
たまたま、こいつの近くに
「早口言葉でもしますか」
「…」
「冗談っすよ、集中しなきゃですね…無視しないでください」
「あー」
「うわっ、何すか。その気の無い返事！　瀬戸先輩ってダークですか」
何の話だ
早く長官に見つかって叱られればいい
「先輩伏せてー」
「あ？」
反射的に伏せたのがよかった。
真上をペイント弾が通り過ぎたのだ。
実践では実弾の、ダミー弾だ。
当たったら失格。
「何すか？」
「…あり…が…何でもねえよ」

「ここって祖国って感じしないっすよねえ」
「まあ、ジャングルなんてそんなもんだろ」

「やっぱ、祖国と言えば伝統菓子達ですよ」
「軍に入ってから甘いものは口にしてない」
「もったいないですねえ、人生の要ですよ」
「と言うよりな…」
俺は無言で移動した
そいつも気づいたらしくついてくる
いや、ついてこられてもな
「瀬戸先輩さすがですね、俺あんなに近づかれてるなんて気付きませんでしたよ」
「祖国のことを話しながら、なら理由でも問題ない」
「そんなわけないじゃないすか」
「判っているんだな」
「先輩横横」
またもペイント弾だ。
いつもより多いな
喋っているからか
当たり前の話だ

落ちてきた影

「お腹空きましたよ」
この状況でか
「やっぱりあのポテトパイを考えちゃダメっすねえ」
「お前、北から来たんだな」
「興味持ちました？」
「別に」
持ってねえよ

「瀬戸先輩、いつ出動命令出るんすかね」
「確かに遅いよな」
いくらペイント弾を打たれようと、許可が出るまで動けない
「じゃ、これ食べる時間あるっすよね！」
そっちかよ
須賀は胸元から小さな包みを取り出す。
「祖国に残しぬ恋人の愛情焼き菓子なんと美味かな」
うまそうに食べるな…
「静かに食べろよ…」
「日本の古事記に載ってそうじゃありません？」
「古事記は知らんが、焼き菓子は載ってねえよ」
「やっぱり日本て言えばー…『和』ですからね」
「ちょっと口を閉じてろ。上の気配が気になる」
沈黙。
カサリと何かが鳴った。

「先輩、こいつどうします？」
「捕虜なんか聞いてないよな」
「まずは、締め上げましたが」

「しかし、よく捕まえたよな」
あの時言ったすぐ後に人が落ちてきた。
ペイント弾が装填されているであろう銃を担ぎ、木から飛び降りてきた。
哀れなくらいにあっさりと須賀に捕らえられたのだが。
「多分、敵チームで良いですよね」
「やるならやれよ！　撃てばいいだろ」
捕虜にしちゃ勝ち気だな
迷彩服がしわくちゃになっている
「あんたさ、粋がってるけど女の子でしょ？」
二人が驚いた。
「なっなっ…だから何だよ！」
「えっ、女だったのか、これ」
首を締められそうになったのは私だった
なぜだ

「私は吉瀬。西軍よ」
腹を決めたのか、口調が完全に女性だ。まあ、きつめだが
「須賀っす」
「瀬戸だ」
「早くさ、腕解放してよ」
「いやだね」
ガキか
「しなさ・い・よ」
「三発蹴りましたね」
「だからなによ」
「先輩、どうします」
知るか
「ま、倍返しで」
ニコリ

「ちょ、手が塞がってる女になにすんのよ」
「六回蹴るだけですって」
「断る」
「却下で」
「よける」
「禁止で」
「叫ぶ」
「あ、それ困るなあ」
戦い始まったらこいつらどうするんだろうな

談戦開始

「頼むからさあ、落ちつけよお前ら」
「ヒャハハハ、見ろ人がごみのようだ」
「それ人じゃねえし。虫ですらねえし。蹴らないでよ」
「いいか、ここには崩してはならない雰囲気と言うものがある。これを崩してしまえば作った人間がそれはそれは哀れな状態に陥り、二度とその空気を作ることが出来なくなってしまうんだ。これすなわち、気功の法則と言い、そしてそれを守るために我々がすべきは…」
「うるせえっつってんだろうがあ」
スパン、とな。
「先輩い、どっからその冊子持ちだしてきたんすか」
「突っ込みどころはそこじゃないと思うけど」
「知らねえよ、お前らは此処で果ててしまえ」
さっきから須賀が相手にしているのは、木の実達だ。
かわいそうに

女を助けてからと言うもののずっとこの状態だ。
やはり二人とも捨て置けばよかっというものだ。
特に須賀。
「先輩先輩先輩、ねえ先輩。あれって基地の方からの煙ですよね。うわあ、何の合図でしょうかね。先輩あれは、これは、そっちは…」
「黙れ」
そして敵軍らしいがそばを離れない女。
「保存食がクッキーとか舐めてるわ。何これ、発煙弾？　威力小さそう。あら、これは包帯か。よし、貰っておこう」
「返せ」
神経がいっそ切れて欲しい。

「先輩、横から来てますよ」
ひょいと首を下げる。
その上をペイント弾が過ぎ去った。

いつまでたっても突撃の合図が出ない。
だから、こうして暇であるかのように喋れるのだが。
「まずこの目的ってなんでしたっけ？」
「今さらだな、野外訓練の文字通り、実践の環境に慣れるってものだろ」
「じゃあ、こんな闘いしなくても、キャンプ道具持たせて一週間山に放置でよくないですか？」
「よくないです」
「瀬戸先輩ってドライですねえ」
「あたしもそう思うわ」
「知るかよ」
「ほら、ドライフラワー」
「あ、確かにね」
何の話だこれは
「しかもこうして歩き続けてるのに、敵さんはじめじめと追ってくる」
「悪かったわね」
「謝るなら情報くれ」
「何処ぞのドラマの台詞をパクってんだ」
「先輩、年ばれますよ」
「誰にだよ」
「さてね、誰でしょうか」
うるさい

手に下がる銃が重い。
どうせ入っているのはペイント弾なのだから打ってもよいのでは

ないか。
ぞわりとした。
自分がこう思い始めたと言うことは
「瀬戸先輩、見て下さい」
木に映る青い染み。
「威力弱すぎにもほどがありますよね」
「私もそう思ってたわ」
「捕虜には聞いてません」
「権利はあるわ」
「捕虜と認めた」
「どうでもいい」
「つれないなあ」
「瀬戸よりまし」
「呼び捨てかよ」
「先輩も打ってみたらどうです？」
「馬鹿野郎」
結局、背後の追手を振り払えたから感心だ。

しばらくして不満げな声が後ろから聞こえた。
無視を決め込んだが結構苦しい。
「こうして歩き続けて早半日。未だ合図は出ず、敵からの攻撃をかわし、かわしかわし。時に受けたペイントが一着しかない戦闘服にへばりつくこのありさま。さらに空腹がピークを迎える。なのに保存食は一食分だから手もつけられない。靴には泥がこべり付き、髪の毛は慣れない帽子の所為でぼさぼさに」
「そろそろ殴ろうか」
「ごめんなさい先輩」
「不満が多いわよね」
「そのまま返そうか」
「また返してあげる」

「受け付けませんよ」
平和だな
先輩でもいいかもしれないな、どうでも。
「いくぞ、御二人さん」
「さんづけでしたよね」
「ええ、雨でも降るわね」
何故こんななれなれしいんだろな

突然の戦闘

「そう言えばお前は戻らなくていいのか？」
「腕縛っておいてよく言うわね」
「吉瀬さん、こわあい」
「須賀さん、きもおい」
何処の高校生馬鹿だよ
「あたしはしがない前線兵ですから」
「前線って結構苦労しなきゃいけないっすよね」
「ま、国事情によるだろ」
「先輩、くわしい」
「ありがとよ。ところで、吉瀬。仲間は？」
「ほらきた、尋問よ」
「先輩、ざんこく」
「違う、お前を返そうとな」
吉瀬が目を丸くする。
「返してくれんの？」
「なんでっすか？」
「邪魔だから」
単純明快

吉瀬からの返事は予想通りだった。
ある意味な
「いやよ」
「はあ？　何でだよ」
「ここにいたら暇じゃないし」
「でしょ、そう思うっすよね」
「待てお前ら、ここは戦場だ」

「どっかの芸人が言ってたね」
「先輩、歳がばれますよー？」
だからなんだってんだ
「お前は西軍なんだろ？」
「かもね」
蹴りたくなってきたぞ
おかしいな
「じゃあ、言いますよ瀬戸さん。あなただったらどうします？
捕虜としてとらえられ、その相手に同情されて逃がされて、自分の軍に戻れますか？　恥も外聞もありゃしないですよ」
「え…あ…そのな」
「オレでも戻りません」
沈黙。
あと少しで丸めこまれてしまう
「それは違うぞ吉瀬」
「何が違うの瀬戸？」
口調を真似するな
考える間をくれ
「今は練習だ」
情けない答えだ
ああ、自分でも情けない
「情けない答えね」
とどめをさすなよ

こうして吉瀬はとどまった。
「じゃ、腕はいいわよね」
まだ結んでたか
「自分で切って下さいよ」
無理を言うなよ無理を
「わかった」

吉瀬はぐるりと手首を返し、縄を解いた。
「解いたわ」
「すごいな」
「基本でしょ」
「先輩もできるんすよね」
「…」
「あれ？　先輩できますよね」
だから、とどめをさすな
「きゃあ」
誰の悲鳴だ
「吉瀬さん！？」
吉瀬が消えた。
須賀は慌てふためいているが、理解できていない自分。
「どうしたんだ？」
「さらわれちゃいました」
「誰にだよ？」
「熊みたいなやつにです」
沈黙。
「よし、置いて行く手間が省けたな」
「先輩、本気だったら残酷過ぎです」
「半分な、本気だよ」
「訓練なんですから、実際は仲間なんすよ」
「わかった、助けに行くよ」
「先輩、左から」
ペイント弾。
かわすのもうまくなったもんだ。
服のシミの数が証拠だ。
「行くか」
「どちらへ？」
「…お前しかわからないだろ」

「あ、えっと、こっちス」
不安だ
　吉瀬のくぐもった声が聞こえる。
「んんっ、ぷはっ。ふふふ、猿轡の締め方がなっちゃいないわね。ほら離しなさいよ、熊男。蹴るわよ？　あ、蹴っていいの。そう…やっぱり殴るわ。え、殴っちゃだめなの？　うるさいやつね」
おかしいな
さらわれてるはずだが
「吉瀬さーーーーん！！！！」
ここに馬鹿がもう一人
スパンとな
「いったあ」
「戦場でそんな大声出す馬鹿がいるか」
「ここにいますよ」
「最悪の言い訳だな」
「最高の指導ですね」
うるさいな
熊男に気付かれただろ
「お前ら、東軍だなあ？　戦闘命令出てねえから手も出せないよなあ？」
むかつく口調だな
「あ」
吉瀬がおかしな声を出す。
「いいよ、来なくて」
その意味を理解したのは二人。
吉瀬は細い体を助力なしで振り上げると、自分を担いでいる男を振り子の原理で蹴り飛ばした。
うん、あれは蹴り飛ばしたな
「綺麗に入りましたねぇ」

「一件落着だな」
「だから、歳がばれますって」
「予想してみろ、幾つだ俺は」
「……四十五？」
本気で殴った。
「二十八だ馬鹿野郎」
「あんたらさ、助けに来たなら最後まで見てよね」
熊男の手をねじ切らんばかり締めあげて言う台詞かそれは
「無事でよかったな」
「棒読みね」
他にどうしろってンだよ
「吉瀬さん！　無事でよかったっすね」
「ありがと、小僧」
にやり
「…抱き締めに行けなくなっちゃいました」
「行かなくていいぞあんな女に」
「聞こえてるけど？」
「聞こえさせたんだよ」
険悪。
さて、行くか

解除不能

最早この二人を引き離すことは不可能だった。
誰でも良い。
こいつらを俺から離してくれたら何でもしよう。
例えば…一日留守番してやるよ
「先輩？　置いてきますよ」
「年長者でしょう、あんた」
そうか
逆に置いていって貰おう
「先に行ってくれていいぞ」
「いや」
「無理です」
何故だよ
こんな口うるさい男置いていって良いだろ
「先輩がいなきゃ、見つかった時の対処が出来ないじゃないですか」
「それに、私は捕らえられてるっていう確証を持てるやつの側にいなきゃ」
「それってオレじゃ役不足すか？」
「須賀で良いだろ」
「なんか、や」
なんかってなんだよ吉瀬さん

結局川の字だよ
「先輩、頭」
「ペイント弾は来てないぞ？」
「ちっ」
「ちっじゃねぇだろ」

「駄目よ、もっと確信味のあるものじゃなきゃ」
「伝授してください」
「俺は引っかかってやるほど優しくないぞ」
「ほう、なる程…」
内緒話を楽しむ二人を放って前に進む。
「先輩！　危ない」
「あ？」
「あんた、足元よく見なさいよ！」
二人の気迫がただ事では無かったので、下を見た。
地雷だろうと踏みながら。
「馬鹿が見るー」
須賀の間抜けな声が耳に突き刺さる。
足元は今まで通りの木の葉のクッションだ。
「成功ね、私のお陰でしょ」
「吉瀬さんナイスです」
「まずは手を上げろ。戦場を舐めた罪に、その腹にプレゼントをやろう」
「先輩、目が本気です…」
本気にもなるだろ
餓鬼扱いされたんだからな

頭が痛かった。
二人のマシンガントークは言うまでもないが、先程から視線を感じていたのだ。
「それで、オレが合図して吉」
「静かにしろ」
須賀がキョトンとする。
吉瀬は不満げだ。
「新たな刺客だ」
「新たな家族ね」

「女ですかね？」
「黙れ」
気配が消えた。
気がした
「果てろ」
首筋にナニカが走る。
血の気が引いた。
「先輩！」
今は叫ぶな
頭が割れる。

刺客を仕留めたのは吉瀬だったらしい。
目を開けると、黒づく目の人間を縛り上げる彼女がいた。
「西軍の仲間よ」
「先輩、血は拭きました」
「…ありがとな」
さて
新たなやつは少々物騒らしい。
まずは自己紹介からだ。
「須賀っす」
先手は青年だった。
こいつ歳はいくつだろうな

木々の切れ目

「とりあえず六発蹴りますか？」
「何でだよ…」
「蹴ればいいじゃない」
「…」
吉瀬とは違って寡黙なやつだな
「…萌」
「は？」
「…萌だ」
「可愛い名前っすね」
「あ、名前か。何かと思った」
「よろしく萌チャン」
「やめといた方がいいわよ？　彼女あたしよりもＳだから」
「…フ」
「うわ、笑った」
「須賀、怪我する前に遠ざかっとけ」
マジみたいだな

さて、四人になった
出動っつわれたらどうするよこれ
「吉瀬さん手は解いてやりましょうよ」
「そしたらまた瀬戸にやったみたいに真っ先に頸動脈狙ってくるわよ」
「え？　俺頸動脈やられたの？」
「だから血拭いたって言ったじゃないですか」
まてまて
え、頸動脈って結構大変な脈じゃ
「やっぱ六発蹴っとけ」

「まあ、非道ね」
「先輩ひどおい」
脈切られた方が非道か
「…ごめん」
萌が、萌が単語じゃない文を言った！？
「クララが、クララが喋ったあ！」
乗るなそこ
恥ずいのはこっちだ
ん？　ごめんって単語か
って真剣に考える自分めが
「…一発で仕留め損ねた」
「？」
「…楽にしてやれなかった」
ちょっと待て
電波かこの子は
何故日本語が通じないんだ
「殺す気だったの？」
聞くなそこ
「…無論」
いや、論点は大量にあるだろ

木々を抜ける地点まで来てしまった
「話してるとあっという間っすねえ」
「須賀って体力あるのね」
「ありますよそりゃ」
「…見えない」
「ちょ…萌さん」
何で意気投合してんだよ
「瀬戸はつらいんじゃない？」
「年ですからね…痛いっ」

グーでいった
「二八だと言ったろ」
「嘘だあ」
「…嘘」
「嘘ですよ、冷静に考えたらやっぱ嘘です」
黙れお前ら
二八で悪かったな
どうせアメリカンアイドルみたいにはなれねぇよ
「…」
「憐れみの眼で見るなあああ」

これだけ大声で話してりゃ見つかると思ったんだがな
敵さんもこの人数と組み合わせにビビってるのか
「吉瀬さんて前線なんですよね」
「そおよ」
「俺は…少佐です」
「嘘つけ」
「嘘じゃないっすよー」
「間が空いてただろおが」
「じゃあ、中将でいいっす」
「上がってんじゃん」
「…中将は私」
「あ？」
「え？」
「嘘ー？」
「…だから腕を解け」
だんだん言語が発達しているじゃないか
可愛げないな
頸動脈切った時点でないかそれは
「…ナイフなんて持ってないから」

「出せ今すぐ」
天然か？

落ちた先

阿呆と天然とSと一般人。
「結局いつまで待てばいいのか」
「先輩、きっと西軍の人も退屈しているんでしょうねえ」
「今更敵のこと考えてどうするんだよ」
「暇つぶし？」
「あっち行けよもう」
「ちょーことわる」
「吉瀬…」
「…中将の権利を使う」
「萌！！」
誰か俺の味方はいないだろうか
敵でいいよもう
あ
この女達は敵だったな
「あきらめましょうよ先輩」
「人生にか？」
「…なら手伝う」
「手伝うな」
「やーね、萌は楽にしてくれるわよ」
「俺が死ぬ方向に話が進んでいるのか？」
「駄目よ、そしたら捕まった時に」
「俺じゃ役不足な」
「…楽に」
黙れお前ら

カサリとなった。
もう慣れたもんだ

全員がペイント弾をよける。
どさりとなった。
「何の音だ？」
「だからね、吉瀬さん。オレは思うんすよ」
「黙って須賀、何の音？」
「…わかる」
「萌？」
「…ここ危険だ」
「待てよ、何の話だ？」
どさりとなった。
「ちょ…怖いすね」
「萌何処行く気？」
「…安全地帯」
「おいっとまれって」
「ったく、ナイフ取り上げただけじゃだめね」
「萌チャーン」
「追い掛けるぞ」
どさりとなった
何故か倒れた

視界が低い。
「…何が…」
頬に触れるのは葉っぱじゃない。
静かだ。
「このウドの大木」
ああ、安心する声だな
「…吉瀬」
「あんたのせいで失格よ馬鹿」
馬鹿？
久しぶりに聞く言葉だな

「だから何が」
「トラップ」
「あ？」
「あんたが足を踏み出した途端に作動したの」
「何がだ？」
「トラップっつってんでしょ」
「須賀と萌は？」
「あんたの近くにはいなかったから助かった」
そりゃよかった
「吉瀬は？」
「ここにいますけど？」
「じゃなくてだな」
「…一生の恥よ、馬鹿と一緒に落ちるなんて」
「落とし穴？」
「あー、寝ぼけてるやつと話したくはないわ」
「何だそれ」
沈黙。

息苦しい。
「何処だここ」
「さっきから調べ回っているにしちゃ収穫ないのね」
「狭いし、暗いし、息苦しい。洞窟かここ？」
「じゃない？」
「会話したくないだろお前」
「今反省会中なのよ」
「なんのだよ」
「萌に気付けて私に気付けなかったトラップの避け方について」
「…」
「そんな目で見る権利はないわ」
「見えるのか？」

「何も」
沈黙。
「…っかしいな」
「…何がよ」
「お前らが騒がしかったからさ」
沈黙が何か嫌だ
何て言ったら人格崩壊だな
「から？」
「今が心地いいな」
「見えてたら殴り飛ばして踏みつけていたわ」
そりゃよかった

どさりとなった
「また誰か落ちてきたのかしら」
「…う」
「怪我人か？」
「不用意に近寄らないでよ」
「わかってる」
暗くてよくわからないが動いてる
…子供？
「…うう、何ここ」
「大丈夫か？」
「だれ？」
「子供だ、小さい少女だ」
「…あ」
吉瀬が変な声を出す。
前も聞いたなこれ
「っ待て吉瀬ええええ」
「放してよ、こいつは危険なんだから」
「だからと言って目の前で子供を殴るやつを平然と見てられるか

！」
「子供？　こいつは子供なんかじゃない、こいつは…」
「へーえ、吉瀬りんじゃん」
「え？」
「また私のトラップに引っかかっちゃったのぉ？」
「このやろ…」
「誰だこれ？」
何だこの状況

少女の名前

「今度の浮気相手はその人ー？」
「殴る」
「殴んなって」
「本当に亭主みたいじゃん」
「うるさい」
「誰だこの子は」
「私を生んだくせに覚えてないの！？」
「生めねーよ」
「突っ込みどころが違う！」
「うるさい」
「なによ吉瀬リン、ぷんぷんしちゃって」
「うるさいっつってんだろこのガキ餓鬼餓鬼っ」
地獄かここは
「せとぉっ」
はい、なんでしょうか
「このばかぶん殴っちゃって」
御断りいたします
「何でだよ、俺を巻き込むな」
「あんたが声かけなきゃこんな状況になんなかったっつうの」
濡れ衣だなあそれ
「いいからぶっとばしてこいつ」
「…だまってりゃ言いたい放題しやがって吉瀬リン」
あ
うん
これやばいな

本能には従うタイプだ
その相手が幼女だろうがなんだろうが
危険危険信号が出りゃもう確定
にげろ
「逃げろおおお」
「え、ちょ、ぶっとばしていってってさっきから言ってるでしょおが！」
知るか放せ
「吉瀬リン、つかまあえた」
吉瀬の腰の下に細い腕がしがみついている。
やばいやばい
「ひっ」
吉瀬が一番か弱い声を漏らした。
「さあて、なにしてほしい？」
「…は、なして」
「聞こえないよお」
こんな子供は見たことがないな
「歯あ折られたくなかったらこの汚い手を離せって言ってんだろ
このバカ娘がああああ」
吉瀬爆発
うん
地獄だな

乱闘開始
になると思っていたんだが
「はい」
「どうも」
あっさり離しやがった。
観客を大切にしろよな
「で？」

「ん？」
「このこはだれだ？」
何で訓練場にいる
「旧友」
嘘つけ
「やだなあ、親友でショ？」
「あっちいけよもう」
あれ
仲よさげだ
「せめて悪友」
「下がってんじゃん」
ええと
「名前は？」
「こいつは瀬戸よ」
「りょーかい。私は鵜那よ」
「う…な？」
「変な名前って思った？　ねえ、思ったでしょ」
危険危険
「断じて思っておりません」
やばいやばい
「ふうん」
殺気

「せんぱーい？」
「す…が！」
須賀の声が上から響く。
「無事っすか？」
「無事っす」
「キャラ変わってないすか？」
「変わってないす…早く引き揚げろおおおおおお」

この地獄から抜け出させてくれ
がし
がし？
「簡単に脱出させないよ？」
鵜那さ…ん
「須賀助けっ…」
「だあめ」
意識真っ暗
あーあ
これ死んだな
うん

声が聞こえる
「と…と…せと」
頭が痛い
「起きろこのウドの大木！」
おお
吉瀬か
「袋叩き2秒前」
「起きた起きたってグナツ」
「あ、御免」
御免じゃねえよ
「鵜那は？」
「後ろで寝てる」
「ここは？」
「さらに地下」
「状況は？」
「かわらず」
地獄か

暇つぶしの地下

何でこうなった
整理しよう
落ちた
鵜那に会った
何か地獄
なにもわかんねえなあ
「ない頭で何考えてんの？」
「何も」
「余計存在価値ないわね」
「須賀と萌が抜けて余計に性格悪くなってないか」
「余計なお世話よ」
「そりゃ悪かった」
「な…気持ち悪い」
「なんでだよ、俺謝ったろ」
「それがいや」
「あそ」
「うん、そ」
そうかい

暗いなあ
あれね
視覚的にも空気的にも両方パタンね
「うるさい」
「俺音たててないけど」
「視線がうるさい」
「どうすりゃいんだよ」

てか見えるのか
この純粋な闇で
「鵜那たたきおこすわ」
「寝てんのかよ」
「こういう子だもの」
「なにつながり？」
「血筋つながり」
納得
「だからこの性格ね」
「何か言った？」
「いいえ、なにも」
「ふうん」
「何で殴ったし」
「さてね」
ちょと明るいな

ごつっとなった。
「お前、なにした？」
「痛いなあ吉瀬リン」
「あら、おはよう」
「殴っといてそれはないじゃん？」
「ついでに脱出させて、いや、させろ」
「やあだ」
「拒否権をはく奪する」
「断る」
「権利ない」
「つくる」
「馬鹿じゃないの？」
「馬鹿じゃないの」
ついてけねえ

「瀬戸も何かいいなよ」
「なんか」
「殴るわよ？」
「もう殴られた」
「じゃあ、いいのね」
「常識で考えたら殴んねえだろ」
「吉瀬リンは常識外れだから」
「トラップ作れる９歳のあんたに言われたくない」
え
９歳とおっしゃいました？

鵜那に情報プラス１
トラップが作れる９歳
「まさかこの穴」
「私が作ったよ？」
よ？　じゃないだろ
「だから苦手なのよこの子」
「天才だから？」
「含みのある言い方ね」
「いやっ、けしてお前が劣っているとは」
「墓穴ね」
やべ
しっかりしろ２８
「とにかくここから出ない限りは単位を貰えない」
「確かにな…やべえええええええ」
「邪魔するもん、そのために来たし」
何だこの子
何だこの子
大事なことだから二回言いました。
「私の手には二つのカギが下がってます」

「奪えばいいのね？」
「ヒント1、鍵は物質じゃありません」
哲学だな
「あのゲームね」
どれだ？
「策士なら勝てるよ」
「勝つわよ」
「わかんねえけど勝ってやるよ」
「それでこそ瀬戸」
だって出れねえし
やることないしな

言葉は繰り返す

両手に鍵。
でも物質じゃない。
奪えば出られる。
誰か答えくれ
「ちなみにリミット3分ね」
ランブルかよ
「十分ね」
「頼もしいな」
「あんた頼りないから」
「ぐさりときた」
「刺してやったわ」
スタートスタート
心が折れる前に
「ルールは簡単、私はここから出られる技術を知ってここにいます」
じゃなきゃ馬鹿だな
「それを探って見つけられたらあなた方の勝ち」
じゃあリミットいらないな
「私は質問に対してすべて正直にイエスかノーか答えます」
「おーけー」
「はじめよっかい」
「鵜那、お前の年齢は？」
「はい」
あれ
「イエスかノーかであらわせる年齢なんざないわよ」
そうでした

結構難しいなこれ
「ここは暗いわよね」
「そうね」
「空気は流れてるわよね」
「みたいね」
「上にかしら」
「だろうね」
「登れるか？」
「ええ」
「梯子はあるかしら」
「いいえ」
「地上まで２０分かかるか？」
「いいえ」
まじかい
「貴方は一人で出る気かしら？」
沈黙
「…ええ」
「このガキっ」
「だから殴りかかんなって」
止める身にもなれ
「後２５秒」
「体内時計か？」
「ええ」
ああもう
面倒くせえ
「上にあげろ」
にこりと
「正解」
え

俺なんて言った？

吉瀬がバンバンと背中を叩く。

「まさかあんたが正解に辿りつくとはっ」

「正解って…」

「その命令を待ってたんじゃん」

「命令って」

「あんたがとにかくチャンスを掴んでくれたのよ」

「ん、ああ。そっか」

わかんねえけど

かわんねえけど

鍵の話どこ行った？

二個のカギ

上にあげろ？

錠前と連動でもしてんのか？

ああね

納得

「上にいかせてくれんの？」

「仕方ないじゃん」

「早く案内しなさいよね」

「吉瀬リンは待ってりゃいいじゃん」

「何の必要が？」

「こっちがきいてるのにぃ」

「早く案内しろよ」

「しかたないねえ」

「やあっと地上ね」

光

うわまぶし

「土埃どろっどろ」

「ちょ、そばで叩くなよ」

「どの道いっしょじゃん」
なにがだよ
「じゃぁまたあそぼ」
「あ、待て鵜那あああああああああああ」
行ったな
穴に潜って
「モグラかあいつは」
「俺も言おうとしてた」
「姪とは思えないわ」
「お前の親戚って全員すごそうだな」
「全員？　鵜那だけよ」
おっと
「絶縁したもの」
そっちか

「せんぱーーーーーーーい」
溜息
あれだけ叫べるやつは一人しかいない
どうやらそれほど離れていなかったようだ
「ここだ須賀」
「…いた」
「先輩っ」
「…吉瀬」
「待たせたね萌」
「…待っていない」
おいおい
「今苛々してんのおおおおおお」
「だからって萌に当たるなって」
「放しなさいよおおおおおおお」
断る

って何回言ったよ今日

終章前夜

そろそろ議論に入ろうか。
いいだろもう
「今回の演習変じゃね？」
「先輩？」
「え？」
「…」
やっぱ考えてなかった。
やっぱこいつら何も考えてなかった
「こんだけ攻撃仕掛けられといて、頸動脈切られかけられといて、穴落とされて変なゲームさせられといて、保存食が消えて…何故攻撃命令が出ないっ」
ちなみに保存食を喰ったのは吉瀬だ。
言うまでもない。
「ふうん、確かにおかしいわね」
「…敵の私は何も思わないが」
「そんなこと言ったら吉瀬リンも敵じゃないすか」
「吉瀬リン言うな」
「殴るなんてひどいっ」
「…暴力は出世できない」
「五月蠅いわね萌。生きて帰って何でまたあんたの減らず口聞かなきゃなんないのよ」
待てとまれストップ
「お前ら危機感ないだろ」
「何に対して？」
ハモるな
「東軍どうなってんだ？」

かさかさ鳴った。
３６０度何処からも。
「やばくない？」
「囲まれちゃってますねえ」
「…ザコ共が」
「ああ…あ、ああ、あぁぁぁあっっ苛つくな手前らああ」
規制なんて知るか
腰で温まっていた銃を構える。
「先輩がぶち切れです」
「あたしもー」
「…果てろ」
奇妙な四人は四方向に飛び出した。
隠れていた軍勢が一斉に立ち上がり乱射する。
どっからこんなに人が出てくんだよ
ああもいい
どうでも
「せんぱーい、なぎ払っちゃって」
「瀬戸つよいじゃん」
「…私が勝つ」
「ちょ…萌。何に対抗してんの。その人もう気絶してるから、それ以上切っちゃだめって」
「はい、十五人目っす」
「…二十三」
「あんたらねえ…はいっ二十一」
うるさい
あ、弾が切れたか
まあいいや
ペイント弾だし
このまま銃を振り回せば
「先輩が怖いっすー」

「あれが本性なんじゃない？」
「…三十六っ三十七」
「ちょっと、萌ちゃんもいっちゃってるねー」
「マジで、ね」

一息ついたら静かだった。
「あれ？」
須賀の声が横から響く。
「あれ？　じゃないっすよ先輩。何人倒したんですか？」
周りにたくさんの人影。
動かない。
俺がやったのか？
「多分…六十一」
「覚えてんのかいっ…あんたねえ」
「…負けた敗北最悪落胆終末」
「萌ちゃんが凄まじい勢いで落ち込んでいってる」
「萌どうかしたのか？」
「知らないとは言わせないわよっこの女泣かし」
「いやいや意味わかんない」
「先輩も男だったんすねー」
「益々意味わかんないぞ？」
「…頸動脈頸動脈頸動脈頸動脈」
「萌が狂っている！？」
俺の所為？
「っていうか、この人たちなんなんすかね」
「それを話し合おうとしていたんじゃないのか？」
「あ…なるー」
「でも、こいつら東軍よ」
「え？」
「ほら、あんた達と同じ恰好じゃない？」

「本当っすねー…何で」
「こいつらペイント弾は使わなかったよな」
「そこだけ命令に従っていたんでしょうか…」
「東軍の禁止令はペイント弾だったんだ」
「そうっす」
お前が真っ先に破ったがな
「へえ、西軍はリュックの保持よ」
だから荷物あさっていたのか
「どうする？」
「帰りはしませんっすよ」
「誰もそんな案だしてねえよ」
「…帰還帰宅忘却森羅万象」
「萌のキャラが変わっている！？」
ほっとけ

とりあえず木に登ってみた。
会議っぽいだろ
「整理しよう」
「オレは待機が始まり十分後に瀬戸先輩に出会いました。そこから二人で行動を始めて一時間、吉瀬さんの襲撃を受け、オレがあっさり仕留めちゃいまぐふ…仲間になりました。その後吉瀬さんがさらわれかけて逆に犯人をのしちゃったのが五時間前。先輩が頸動脈やられて萌ちゃんに出会います。森を抜けてぶらぶらしていたころ、萌ちゃんの驚異的な感覚でトラップを退けたはいいものの、先輩と吉瀬リンぐぬっ…吉瀬さんが行方不明になったのが三時間前。ようやく四人揃ったと思ったら先程の襲撃です」
御苦労
「毎回敵変わってんじゃん」
「確かにな、吉瀬の時は西軍の変態だったし、萌は西軍だろ。鵜那は部外者だろ。さっきのは東軍」

「…私を敵に区別するな」
「鵜那はある意味部外者でもないけどね」
「…シカト？」
「ふう、混乱は解けずっすね」
「…シカト？」
「決めた。東軍の基地に乗り込むぞ」
「先輩格好良い」
「なかなかの案ね」
「…死か都？」
「行くぞ」
「オレのが道案内できますよー」
「じゃ、頼む」
「あれ、意外とあっさりー」
「早く案内しなさいよ。ほら、萌行くわよー。ちょ…すねないすねない。泣かないの。ほらナイフしまって。あーはいはい頸動脈頸動脈うるさい。ちゃんとナイフしまって。瀬戸の首睨まないの」
置いてこうぜ？

四字四字熟語（前書き）

１０話完結にしようと思ってたんですけどねー
彼らは止まらなそうです

四字四字熟語

「発見発見はっけーん」
「…五月蠅い」
「いずあっ…銃で殴らなくてもいいっすよね」
「五月蠅いのよ須賀」
「吉瀬さんまで」
「お前ら緊張感ねーな―」
「だってまだ門の前じゃない？」
「門前から普通身を潜めるだろおがよ」
「…無視」
「萌に恨まれてるんじゃないの？」
「先輩が萌チャンをたぶらかすから…」
「俺がいつ誰に何をしたか言えよ」
「いずっ…あ、萌チャンのが痛かった」
「そうか、よかったな」
「…無視」
「行くわよあんた達」
「お前がリーダーかよ西軍」
「この際カンケ―ないわよ」
あるだろおい
今は東軍本部前
「ランチャーに手榴弾に小銃に改造銃に煙幕」
「どこから奪ってきた…」
「やだなあ、武器庫の位置くらい把握済みっすよ」
「鍵はあたしがねん」
「泥棒とピッキング犯が…」
「あら？　いらなかったらあんたは丸腰で行けば？」

死ねと？
「…ナイフ一七本」
「はいはいー萌チャン」
「待て。多すぎだろ」
「…」
無視するなよ

「敵はー三階西側の会議室にいる模様ー」
「ご苦労」
「偵察は得意っすから」
「今さらだけどさー、これで全部勘違いだったら受けるよね」
「…」
「…」
「…」
「あ…ごめ。うん、大丈夫まちがいないわ」
空気読めよなあああああ
「勘違いだったら二〇〇人に襲われないっすよ」
「たしかし」
「確かにな」
「そこは乗りなさいよー」
「…たしかし」
「よおおおし、いい子ね萌！」
だからこのノリ
某ライトノベルの二人に似てないか
「いっくわよおおおお」
「おおおおおっす」
「…ぇーい」
「瀬戸っ」
「ん、いえーー」
「こんのドライフラワーめ！」

「もうよくねそれ」
「じゃ、瀬戸先輩のあだ名ドライフラワー決定」
え
「行くわよドライフラワー」
「行きましょうドライフラワー」
「…ワー」
すみません
ごめんなさい
まじやめろ

誰もいない門
「手榴弾投げなくて良かっただろ」
「だって誰もいないもん」
「あーおもしれえおもしれえ」
「ギャグじゃないわよっ」
「吉瀬さん…」
「痛い眼で見んな」
「オレが痛いっす」
殴んなよかわいそうに
誰もいない廊下
「ナイフを無駄遣いすんな萌」
「…支持するな」
「してねえよ」
指示はしたがな
「あの角曲がったら絶対敵出るあの角よ…せいっ…あれ？」
「だからいないって言ったじゃないっすかー」
「もっと武器のストックを計算しろお前ら」
「刺さったら抜けない壁が悪い！」
「言ってろよ」
「ドライフラワーが怖いよお」

「仕方ないわよ、温もりと言うものを持っていないんだから」
黙れ
「…ワー」
さっきからなんなんだよ
「…ラワー」
！！！
「何萌いじめてんのよ」
「こいつがわるい」
「萌チャン泣きそうじゃないっすか」
じゃあさ
じゃあさ
もっとはっきりと言えよいっそ

「つか誰もいねーし」
「つか音もしねーし」
「つかつまんねーし」
「つか正直熱冷めてきたし」
「吉瀬さんそこは語尾『ねーし』で統一」
「あ、悪いね。つか敵誰だーし」
「黙れお前ら」
「だってつまんないんだもーん」
「孤軍奮闘するか？」
「四面楚歌しましょ」
「孤立無援がいっす」
「…背水の陣がいい」
頼むよ
よい子のみんなが誤解して覚えちゃうだろ
「じゃあ…間とって」
パッと閃光弾
敵さんいらっしゃーい

「粉塵爆発で」
つか四字熟語じゃねーし
あ
くそ自己嫌悪

最終戦はサラリと

「さぁて…っ行け！！　萌」
おい
「萌チャン援護隊出動うぅぅう…ヒャッハアァ！」
お前ら…
「先手必勝の法則よ、須賀クン」
「吉瀬リンが、オレを…名前で…クンづけで…呼んでくれたあああ」
「五月蝿い」
あれ
今まで何て呼ばれてたアイツ
「須賀ぁあっ、敵は何体だ？」
「いつまでもスタート地点すね先輩…およそ３０っすよ」
オーケー
ジャキン、とな
来るわ来るわ、廊下の先からワラワラと。
「…あいつら…部下だ！」
マジすか
知らねえぇよ萌お前が真っ先に攻撃してるし
敵は防弾チョッキ完備。
高そーあれ
「なんでアイツら閃光弾が効かないんだ！」
ごめんなさいな
敵は混乱している。
その時だった。
「瀬戸か」
誰だよ

「ククク、お前が主導だから手こずってたんだな」
「有明？」
「こちら、状況が掴めません。吉瀬リンどーぞ」
「同じくよ。後で殴ってやるわ須賀クン」
「やっぱりリンは嫌っすか」
コツコツと靴を鳴らしながら、長官姿のソイツは近づいてきた。
金髪で細かい三つ編みを横に垂らした悪魔顔。
間違いない
有明だ
三十路近いのにかっけぇな
「なるほど、ラスボスはお前か」
「いやぁ？　一応私には上司がいるからなぁ」
あー、あの髪よく燃えそうだな
「とりあえずボコッていいの瀬戸？」
「ククク…可愛い家族が出来たじゃないか」
「誰があんな変態ロリバカの身内だって？」
そこまで言うか吉瀬
悲しいぞ俺は

いつのまにか、本当にいつのまにか、周りには敵がいなくなっていた。
「あれ？」
「あら？」
「あっれー？　誰が倒したんすかって決まってますが」
カラン。
血まみれのナイフが落ちた。
３０の小山の中に立つのは凛々しい彼女だ。
「…勝利圧勝無敵完璧」
「さっすが、萌ね！」
「萌チャンしびれるっす」

「ほう？　あれは日本じゃないか」
「…有明？…あなたの部隊も衰えましたね」
悪い
スゴく気になるんだが萌お前、名字日本(ひのもと)なのか
似合わねー
「…」
「うぉっ！？」
「…馬鹿にしたな？」
え、聞こえてた？
とにかくナイフが無いからってその辺の人間を投げるなよ
「私を甘く見ない方が良いぞ」
「有明…ぶっちゃけ負ける気がしねぇからさ、先に告白タイムに入ってくれないか」
「先輩カッコいい」
だろ？
「私より下にいたくせに余裕だな」
「そんな過去知らないな」
「もともとこの訓練だって、私がいなければ始まらなかったんだぞ？」
始めなくてよかったんじゃね
「…有明…死んで？」
「ちょっ待て萌っ…」
「萌チャン！」「あんたにはもうナイフ無いのよ！」

グサッ
「え？」
「ほほう、胸に隠し持ってたか…ゴボッ…見事に急所を当ててるな」
「…当たり前」
「有あ…け？」

「ガハッ…ククク、まさかこれで終わりじゃないですよね」
有明…お前弱っ
「萌チャン最強だぁ」
「流石あたしの犬」
聞こえなかったね何も
「…う、あ？」
「萌？」
ドサリ
「ククク、未熟者」
「萌チャンに何した貴様！」
思い出した
有明史斗の得意技は暗殺術。
「…首…がぁ…あ」
「萌、今行くからね」
「落ち着け吉瀬」
「無理」
「吉瀬えぇえ！　止まれっ」
「私の可愛い萌の首を赤く染めやがって変態ナルシストナルシストナルシストがあぁああ」
「ククク、私はどれだけナルシストなんだ？」
「吉瀬リンっ」
「はうっ」
「え？　吉瀬…？」
見たこと無い、想像もしていなかった倒れる吉瀬。
鵜那の殺気にもものともしなかった吉瀬が、震えてる。
「負ける気がしないね…今でもか？　瀬戸」
ブチキレそうだ
この温厚な俺がな

「萌チャン…吉瀬リン…嘘っすよね。演技っすよね？　先輩っ」

「予想外にアイツは強い」
胸にナイフ刺したまま、平然としやがって
「女性だからね、優しくしたが。君たちは苦しませてやろう」
「やってみろよナルシスト」
「須賀、ちょっと待て」
「もう、なんすか？　先輩っ」
「なんで今俺たちは戦ってんだ？」
静寂
あぁ、吉瀬が起きてないとこんなに静かなんだな
「答えて欲しいか」
「ったりまえっす！」
まだお前がいたな、須賀
…チャキリ
双剣だ。
「私を倒したらな！」
なんつうか、今言うのもなんだが…ワンパターンだな！
ワンパターンで萌と吉瀬を傷つけるな
「行くよ、瀬戸先輩」
タメになりやがって
「ああ、須賀」

賢者は仲が悪い

須賀が先手を取った。
「オレ、得意分野は肉弾戦なんす…って知ってたかよオラァ！」
自重しろ須賀ぁあ
「ククク、子供はいつでも無垢で罪はない」
タシ
須賀の跳び蹴りが容易く止められる。
「といって…罰がないわけじゃない」
「ぐっ…」
「須賀っ」
「先輩…オレ、迷惑はかけないっすよ」
須賀は腰からナイフを抜き、掴まれた自分の足に
振り下ろした。
「…！」
バッ
「あぐっ」
「貴様…狂ったか」
「へへ、いちか…バチか…あんたが手を離して良かった…」
いや、良くない
良くないぞ須賀
お前の足…血だらけだ
「そして…チェックだ有明サマ」
「なっ」
「えっ」
パチンと鳴った。
須賀が腕を振り下ろした。
有明が崩れた。

須賀が立ち上がる。
「っ…神経まで切っちゃいないっスね」
「お前…何した？」
「やだなぁ先輩、寝てたんすか」
いや、起きてた
目ぇ凝らしてた
「オレの得意分野は肉弾戦だけど、得意武器はコッチ」
ピン
「ワイヤー？」
「貴様ぁ…小賢しいことを」
「あんたの体は自由じゃない。オレが操れる」
クッと須賀が拳を引くと、有明の頭が不自然に上がった。
有明は首を引っかいている。
「いつ、つけた？」
「疑問ばっかスね先輩。跳び蹴りなんて阿呆なこと、策もナシにしませんよ」
「ぐっ、かは」
有明？
「あ、切ろうとか思わない方がいいっスよ。それ、合金ですから」
須賀？
「ふざけるなよ…こんな糸切れで勝ったと思ったか小僧ぉおおおぉお」
有明、流石だ

形成はそう簡単に変わりゃしない
「ゴホッゴホッ」
だろ、有明？
「造作ない」
倒れてるのは須賀
向き合うのは有明

「合金にはな、温度と曲性という弱点があるんだ」
「ゴホッ」
「貴様は武器に慣れていても腕力が無い。まさかワイヤーごと飛ばされると思わなかったろう」
「…せぇな」
「自分の弱点を知るのは貴重だぞ」
「黙れ」
なんか、でしゃばった俺
「先輩…」
「よくやった須賀。あいつ相手に三分持てば上出来だ」
「嬉しくないッス」
はは、そう言うな
「寝て…良いスか」
レム睡眠ならな

有明、お前つえーな
「結局こうなるなら初めから貴様と闘うべきだったな瀬戸。仲間が犬死にだ」
「死んでねぇよ誰一人」
「フフ、大切か？」
いや全然
今日知り合った奴らだし
「あぁ、有明よりな」
あれ、俺ぇええ
思った通りに喋れよう
「じゃあ、今回の告白といこうか」
「断る」
「へ」
「クハハッ、間抜けな本性が出たな」
「…貴様こそ相変わらずの軽口だな」

「その軽口に返しもできないんだな」
「無駄なことしか言えぬなら不要だ」
「だからお前は完璧になれないんだ」
「時間稼ぎは終わりか？」
「お前と戦う事態が暇つぶしだが？」
有明の顔が強張った。

怒れよ
俺、怒ってるから

垣間見える終末（前書き）

またダーク展開でごまかす気ですよこの子

垣間見える終末

「なあ、おかしいとは思わないのか」
「思わない」
即答だ
「なあ、瀬戸。おまえは何でこんな実習が行われていると思う？」
無視だ
「まあ聞け。そう構えるな。何も言わずに殴ってくるな。蹴るな。やめろ。手を伸ばすな。やめろっつってんだろおがあああ！！！」
仕方ない
俺はしぶしぶ距離をとった。
「はあ、はあ…相変わらずだな貴様は…いいから聞け」
「断る」
「理由がない」
「断る」
「倫理的にしゃべれ」
「断る」
「…俺と戦え」
「結構だ」
「てんめえええ！　確信犯じゃねえかっ、待て、とまれ。今のは言葉のあやだ。首を狙うな、下がれえええええええ」
「断る」
「…」
「なあ、有明」
「…」
「なんも考えずに戦いてえんだ俺は」
有明の腹に蹴りが入る。
おお、ナイスヒット

「ちなみに、とまれねえほど切れてるしな」
「…馬鹿が」
「ああ？」
パチン
須賀の真似か？
ヒョコッ。
「あれえ、さっきのお兄ちゃんじゃない？　元気い？」
寒気万歳

待て待て
え…鵜那？
「なんか吉瀬りん死んでるし。ばあかね。で、ご主人様？　この人殺すの？」
「ごしゅ…え？」
「ああ、殺せ。遠慮なくな」
待てこら有明
俺との勝負は放棄か、拗ねるぞ
「あーん、この人弱いんだよお？　つまんない」
「いいからやれ」
「でも…」
「後でクイズ付き合うから」
「やったねん。じゃあ、殺ろっか」
「ことわ…」
「駄目」
この野…このアマ
「鵜那と戦いながらなら私の話も聞けるだろう？」
「いやっ、無理だ有明」
「この実習はな」
「無理です、有明先輩」
「実はな」

「聞きたくないってばあ、有明サマア！」
「うるせえっつってんだよ！　貴様よりむかつく性格になりおって…くっ、だからな」
「わあああああああ、わあああああ」
「鵜那、口閉じさせろ」
「はあい」
ゴッ
鈍い音がした。
あれ？　おかしいな
口が、開かねえ
「お休みん」
顎を殴られた俺は、力なく倒れた。

目をあけると、待機していた場所に戻っていた。
「先輩、先輩、瀬戸先輩？」
「須賀？」
「なにぼうっとしてんですか」
「いや、あれ？」
「ほら早くこの本読んで」
「え？　なんだこの汚い本」
「何いってんすか。それ読まなきゃ次に進めないんすよ？　頭大丈夫ですか」
「煩い。えーっと、何ページだっけ」
「２９８７６０４９１２頁です」
「ああ、そうだったな」
俺は褪せた茶色の本を開いた。
「なんて書いてあります？　先輩」
「かわいそうな棺。誰も入れられることのない小さな棺。生きているのは誰？　この中に横たわっておくれ。お願いするよ。いつか誰かが死ぬ日まで。なんだっけこれ」

「先輩、やだなあ、忘れたんですか？　ほら、あの棺」
須賀が指さした先には…

「…なのか、貴様は！」
「だってえ、命令したのそっちなのに」
「私はな、口を塞げと言ったんだよ。誰が気を失わせろと言った」
「面倒だなあ、もう。穴に帰っていい？」
「駄目だ、クイズしなくていいのか」
「いいもーん、吉瀬リンでも誘…」
「なんだ？」
「…馬鹿。私のお友達まで殺すことないじゃん」
「死んでねえよ、誰一人」
「どっかで聞いたセリフだな、瀬戸」
ああ、ジャンプかなんかの
「聞いてやるよ」
「やっとか」
「だって、これで拒否ったらまたなんか来るだろ。疲れるんだよ」
「そんな理由で聞かせたくはないが、まあいい。この実習はだな、選抜なんだよ」
つまんねえ答え
「真実なんてそんなものだ」
あれ、聞こえた？
「選抜は五人」
ほう
「この中の誰かが死ななきゃならん」
死、ぬ？
「馬鹿かおまえ。そんなん『はいそーですか』って信じるやつがいたら狂人か愛人だ」
棺、棺、かわいそうな棺

「あと一人なんだよ、わかるだろう？」
誰も入ってくれない
誰も入ってくれない
じゃあいいよもう
振り向いた先には…６つの棺が並んでいた。
みんなみんな、専用を用意してあげる

実習は霧の如く

最後だ
バトルタイムスタート
「ねぇねぇ、ご主人様？」
「なんだ」
「吉瀬リン、チャラ男、日本海、瀬戸チャン、ご主人様、あたし…誰が死ねばいいの？」
多分須賀がチャラ男
そして萌が日本海
逆じゃあないだろ、多分
「お前は私の命令を聞いてなかったのか？」
「瀬戸チャン殺せ的な」
「まぁ、そうだな」
「でもね、鵜那思うの」
「私に攻撃する気か」
「まさか、死んじゃうじゃん。そうじゃなくてね…」
色んな答えを予想しておいた。
しかしどれも外れた
「この下らない選抜してる指揮官のしちゃえば？」

苦い沈黙。
「鵜那…本気で言ってるのか？」
「九割方」
「却下だ。貴様はガキか？　ガキだな…」
「だぁから、こいつら今まで戦ってきた奴ら息の根止めてないよ。あたしも後始末なんて嫌だし」
「貴様な…」
「でね、そいつら殺ってたらタイムアップだよ？　無理じゃん」

「なぁ、話し中悪いが、こいつら全員復活したぞ」
悪いな空気読めなくて
「あーあ、全くレディの腹殴るなんて屑だな、ねぇ萌」
「…死ねばいいのに」
「まぁまぁ、二人とも怖いっすよ。俺は、折られた分だけやり返せりゃ十分すかね」
「…あいつのせいで瀬戸との差が差が差がぁぁ」
「萌チャン真面目怖いっす」
「お前ら元気だな」
ボロボロのくせして
「先輩、実は話聞いてましたよ。指揮官のしちゃえばいいんすよね」
「そこだけかよ…」
「黙れっつってんだろ！　周り見ろ貴様ら！」
「有明海がどうしたのよ」
「無視されて傷ついたんすよ、ナイーブチャンだから」
「…ねばいいのに」
「吉瀬リン！！」
「あっ、鵜那」
抱き合うかに見えて直前で立ち止まった二人。
ピッと鵜那が指を指す。
「上も下もないのに横だけあるものなんだ？」
「線？」
「外れた」
「戦場での人間関係」
「馬鹿、正解」
「姪と叔母の再会劇パチパチ」
「うざい須賀」
「五月蝿いチャラ男」
「本当にすみません！」

「鵜那…裏切るのか？」
有明、うん、ブチ切れてるな
随分前から
「違うよご主人様、作戦変更」
「…なにをする気だ」
「この六人で逃げる」
「はあ！？」
五人が同時に叫んだ。
否、萌は遅れたな
「二拓だよ。全員死ぬか、全員生きる。さっき言ったとおり時間もないしね」
「…」
「指揮官てどんな奴なんだ？」

「知らない」
「さあ？」
「…知らんな」
「見たことないっす」
「大体さ、今日がどうやって始まったかすら覚えてない」
「それ…俺もだ」
沈黙。
「有明海は？」
「……覚えていない」
どうやら突っ込む気力も失せたようだ。
「わーわーわー！　頭痛いこと言ったの誰？　死ねよもう」
「鵜那！　自粛しろあんたは」
「なによう吉瀬リン。早く指揮官倒そうよ」
「だから、その居場所もわかんないんだって！」
「なぁ、須賀」
「なんすか先輩」

「お前、故郷のポテトパイ覚えてるんだよな」
「いきなりなんすか。頭いっちゃっ…」
「俺は待機場所からしか記憶がないんだ」
「真面目頭いっちゃっ…」
「有明はどうだ？」
「わからぬ。貴様らを片付けて、５人に絞れという命令を受けただけだ」
「でも有明海のこと覚えてるんでしょ瀬戸内海は」　「ああ、そこがわかんねえ。他の奴らはどうだ？」
「…私の記憶ない」
「萌…あたしと同じこと言うなんて」
「いってねーだろ」
沈黙。
「どうするよ」
「だから早く一人倒せば良かったものの…」
「でもご主人様ぁ、それでどうなったかわかります？」
「指揮官が現れて？」
「棺……」
「先輩、羊がどうしたんすか」
「棺だ。棺だよ。俺なんかピンと来ちまった」
「それはつまり頭いっちゃっ…」
「そろそろ殴るぞ須賀。棺が６つ」
「夢の話か？」
「有明、お前も見たのか？」
「うわ、この二人夢シンクロしてんちゃう？」
「吉瀬リンいきなり口調…」
有明が自分の後ろを省みる。
「この先にな、管理室がある」
「なぁ…六ってさ、やっぱ…」
「確証ないこと言うは無駄だ」

「だな」
「…どうする」
「行くぞ、管理室」
「ご主人様ぁ、いいの？　鵜那、吉瀬リン倒さなくていいの？」
「ククク…もうどうでもいいな」
「じゃあ穴に戻って…」
「それはだめだ」

ラスボスの扉にしちゃ簡素すぎるな
六人は管理室前に並んだ。
「吉瀬リン」
「なに、須賀」
「愛してます」
「精神科行け」
「だから好きです」
「やめろ馬鹿」
「キスしてください」
「代償は命ね」
「じゃあ、全部終わったら」
可愛いなぁ
「瀬戸チャン」
お前かよ
「幼女は範囲内？」
「外だ」
「冗談なのにぃ」
だろうな
「…有明海」
「何だ日本」
「…私だからな」
「なにがだ」

「…貴様を倒すのは私だ。死ぬな」
「馬鹿なのか」
「…覚えてろ」
「行くぞ」
「Ｏｐｅｎ！」
思いっ切り蹴り飛ばした扉の向こうは、書斎だった。
「いらっしゃい」
「指揮官？」
「そうよ」
「どこにいるのよ」
「こっちよ、こっち」
声を追って踏み込む。
「誰も来てくれなかった今まで」
なんのことだ
「有明、声に聞き覚えは？」
「命令したときと同じだ」
「どこにいるんすか！」
「後ろ」
六人が扉を振り返った。
「クスクス、人数オーバーだもの」
「し…き官？」
「みんな失格だわ」
「ふざけんな狂人」
「あらあら棺よ？」
時が止まる。
「…なんか、電波がいるんすけど」
「集中しろ、あれでも指揮官だ」
「何しにいらして？」
「あんたのその制服用済みだって伝えにね」
「嫌よ。私は指揮官なの。皆さん命令待つだけよ」

「だから五百の部下を殺したのか？」
「んー残念ね。まだ百三十二人生きてるわ。あなた方を含めて」
「なにがしたいのよ」
「…」
「こんな人数動かして上に立っといて、あんたなにしてんのよ」
「マジでそうっすよ」
「…ねばいいのに」　「来てくれなかったからよ」
「え…？」
「誰も来てくれなかったじゃない！」

「なにいって…」
「だからだからだからだから！！　みんな入れちゃえば良いんだよ」
「誰か、通訳ちょーだい」
「吉瀬リン静かに」
「なによ、須賀の癖に…黙るわよ」
「様子がおかしいぞ」
「瀬戸、貴様も感じるか？」
「ああ」
「やっぱりこいつらシンクロ…」
「吉瀬リン？」
「はいはい、黙りますー」
「みんなみんな、棺の中に」
「下だぁ！！」
落下。
「落とし穴あああああ？」
「死ぬって…」
「…ねばいいよもう」
「萌、手握って」
「…怖い吉瀬リン」

やばいな
このスピードはやばい
「先輩、空中戦は習ってません！」
「気抜けるなお前は…はは」
「笑ってる場合か。須賀、貴様なんのための武器だ」
「あ、気づいてたんすか。敵のくせに」
ガクン。
「勿論ワイヤーはくくりつけてますよ？」
「がっは…須賀、腰にいつの間につけた？」
「須賀、腕が千切れるかと思ったぞ」
「みんな無事ぃ？」
「なんでそんな元気なのよ鵜那あ！」
「だって、穴は独壇場でしょ？」
「あれ、鵜那チャンにつけた覚えは」
「鵜那はロープ使いだ」
「あん、バラすんだご主人様」
「…いいから早く上げろ。いつまで奈落を見てるつもりだ」
「初めて萌が二文しゃべった！」
「駄目よ、命綱なんて仕掛けちゃ」
寒気
「指揮官っ」
「ダメダメ。こんなの没収よ」
「あいつマジ気違いでしょ！！」
「棺は下よ。入りなさい」
「……お前も入るんだよな」
「え？」
指揮官が固まるのが見える。
「お前は部下全員手に入れて独りで生きてけねぇだろ」
バツッ
あ、切れた

落下だよ
「勿論じゃない…」
へぇ、ご苦労なこって

６つの棺がありました。
全て空だったそうです。
だから、指揮官は思いました。
入れてあげなきゃ可哀想
「ぶはっ」
「ふあっ」
「下水溜まりとか舐めてんだろあいつうう」
「…溺れる」
「萌、大丈夫。手繋いでるから」
「で、先輩」
「言うな」
「いつになったら今日が終わるんすか！」
「あいつが何したいのかわかんなぁい。鵜那立ち泳ぎできないのよ」
「鵜那、私に捕まれ。で、瀬戸、どうする？」
あれぇ
俺、リーダー？
「あ」
「え？」
ボチャン
は？　え、何が
「棺まで案内しますわ」
指揮官、おま…馬鹿だろ
「ついてくしかないだろ」
「長い演習すね」
「だな」

狭くて暗い地下水路を抜けると、広間に出た。
棺が並んでいる。
「着きましたわ」
「ここで眠れってか」
「ノンレムで？」
「…笑えない」
「じゃなきゃ終わらなくてよ」
「あんたマジなにしたいかわかんなぁい」
「先輩、そろそろ手出していいすか」
あれ？
だから大人しかったのか
「無駄です！」
「っ消えんのかよ！」
「あれ、どこいった？」
「…疲れた」
「もう棺入っちゃいましょうよ」
「吉瀬リン…」
「夢落ちよ夢落ち。目覚まさなきゃ」
「瀬戸、私はわからない」
「みんなわかってねぇよ」
「…棺、入るか？」
それ以外にしたいことあるか？
トイレも無いぜここ
「いやっす」
「須賀？」
「鵜那チャン言ったじゃないですか。六人で逃げるって」
「どこにだよ」
「ここ以外にです！！」
「須賀…」

「いやですよオレ。逃げますよ独りでも」
「私も逃げるよご主人様」
「鵜那…仕方ないか」
「…疲れたけど、ここは嫌」
なんだよお前ら
「はっ…行くか」
「先輩！　そうこなくちゃ」
六人。
逃げ道はあるはずだ
「ここに来るまでにね、風が吹き込んでくる抜け穴があったよぉ」
鵜那、愛してる
範囲外だがな
「よおぉし、行くわよ！」
「吉瀬リン、いっきましょう！」
「…エロい須賀」
「何でっすかあああ！！」
うん、いつものテンポでよろしい

実習は霧の如く（後書き）

次回最終回さ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5171p/

待機時間　月夜

2011年11月2日03時26分発行